

『中世の秋』

ヨハン・ホイジンガ著、堀越孝一訳／中公文庫

この本をご存じない方も、本の副題が、「フランスとネーデルランドにおける十四、五世紀の生活と思考の諸形態についての研究」であるから、内容はおよそ見当つこう。ルネッサンスの用語をあまねく普及させた J. ミシュレ、ブルクハルト『イタリア・ルネッサンスの文化』（上下、同じく中公文庫）により、我々にも周知の事実となったルネッサンスの概念が再検討を迫られ、このタイトルの副題に与えられた地域・時代がどのようなものであったかを呈示してみせたものである。ホイジンガは緒言で書いている。「この書物を書いていたとき、視線はあたかも夕暮の空の深みに吸い込まれているかのようであった。ただし、その空は血の色に赤く、どんよりと鉛色の雲が重々しく、光はまがいでざらざらする。」

この本を採り上げたのは、一つには、最近、新聞の「大切な本」という連載欄に、辻井喬氏が、孤立感を深めた時、心を癒してくれた、として書いた記事（2008.9.28朝日新聞）による。何とはなしに新聞に目を通していたとき、目にとまり、氏自身が語るところでは、記憶は定かでなく（60年安保闘争以後、70年代初めの間に違いないといっている）、暗中模索の状態にあるとき、題名に引かれて手にした、と述べている。私が初めてこの本を手にしたのも、大学生の頃、69-70年の学園紛争後、騒動が鎮静化した後であったことを思い出して、同じ頃、同じようにこの本を取り上げたという記事をみて、懐かしく感じられたのでこの本を紹介する次第である。（辻井喬氏の読んだ本は兼岩正夫・里見元一郎訳の創文社版）

いま一つは、たまたま少し前に L. フェーブル、P. ブローデル『ミシュレとルネッサンス』という、L. フェーブルの講義録が翻訳されたもの（石川美子訳 新評論社）を読んだということにある。ルネッサンスという用語が生まれた状況を教えてくれる、1942年コレージュ・ド・フランスで行われた30回の講義録である。また、工学部であるから、このブックガイドには主として工学系に関する本が多く紹介されると思い、皆さんにはあまり手にする機会がない本を紹介しようと考えたことも理由の一つである。

『中世の秋』の内容の紹介は、中央公論社、世界の名著『ホイジンガ』に、堀米庸三氏が解説をほどこしているのを読むにしくはない。実に簡潔明瞭に紹介されている。一読者に過ぎない私では遠く及ばない。読後40年近くにもなろうという

ので、誤りがあっては、と確認のため、これを書くために図書館で久しぶりに中公バックスー世界の名著『ホイジンガ』を探し出してみた。本を読んで大分経った頃、フェルメールの絵を見、乾いた黴の匂いを振り払い、ブリュージュの淀んだ堀の脇に座り込み、しばらく思いを馳せて見たが、『中世の秋』の世界は夢想にも現れず、薄く曇った青い空には何物も捕えがたく、呆然としたことを思い出した。当時、読んだ記憶がないのだが、付録の佐藤正英氏の紹介を読むと、氏は、『平家物語』を対象史料として、ホイジンガに倣って読んでみたら、云々、と書いている。同じような感慨を抱くものだった。振り返ってみて、この本に登場する人物たちは、我々とは隔絶しているのか？あなたの隣人はいかが？と問われているような不気味さを秘めた不思議な森に迷い込む。今一度、ホイジンガの緒言を思い起こしてみよう。

同じような心境に至ったら、一読をお勧めする。背景を知りたければ、マルク・ブロック『封建社会』（みすず書房）等を読んでみたらよい。私自身の欲を言えば、時折、本の紹介欄に、個人的な思い出が載っていることがあり、人それぞれで興味深く、読後感を多くの人にいろいろと聞いてみたい本なのだが、多分、面と向かって語り合うには、背景の理解が容易ではないに違いないから、会話が成立するのが難しかろう、などと考えて残念に思っている。

暇を見つけて読むことしか出来ないのも、門外漢の暇無し族には、翻訳ものありがたい。今少し時間を、と思う昨今、好きなだけ読める時間を持つ頃がうらやましい。遍歴は、机上にもある、と夢想できる時間を持つことがどれほど貴重なものであったことか。あなた方に接するたびに思う。

執筆者紹介

高橋 秀雄

教育開発系准教授。専門領域は、数学。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『中世の秋』上・下巻 ホイジンガ著(堀越孝一) 中公文庫 1976年 1,620円
『封建社会』1・2巻 マルク・ブロック著(新村猛・他) みすず書房 1973-1977年 7,980円

ブックガイド目次へ